

海外で所蔵の日本関係資料 研究、さらなる連携を

福岡市で人間文化研究機構シンポジウム



日本研究は日本に所在する資料でのみ行われるわけではない。国外流出した資料や移民の存在など、世界各地に日本に関する資料が点在している。海外の機関と連携してこれらの研究を進める人間文化研究機構(東京)は6月、九州に関連した研究プロジェクトを紹介するシンポジウム「海外の向こうの日本文化」を福岡市で開いた。写真。

同機構は現在、オランダ・ Haag 国立文書館所蔵で東インド会社の江戸初期政策を示す「平戸オランダ商館文書」、バチカン図書館所蔵で豊後臼杵藩キリシタン関係史料の「マシガ文書」、シーボルト父子が収集した日本関連の「シーボルト・コレクション」、北米日系移民の言語生活史料の四つを柱に共同研究を進めている。それらはこれまで、現地に専門の研究者

がいない、保存補修のノウハウがない、所蔵元が複数で連携が困難などの理由で死蔵に近い状態だった。共同研究の実現により、資料のデジタル化、企画展開催などの成果が出始めている。

シンポジウムでは各共同研究の担当者が概要を紹介し、活用策や課題を議論。平戸藩史料などの研究に携わる岩崎義則九州大学院准教授は「4代目藩主松浦鎮信の時、キリシタンの疑いがかげられ史料を隠滅してしまった。その意味でもオランダ商館文書に期待している」と語り、国際日本文化研究センターの稲賀繁美教授は「日本研究においてオランダ語は非常に重要だが、今、学ぶ人が少なくなっている。機構の4プロジェクトだけでは手が足りない」とさらなる連携を呼びかけた。(大矢和世)